



橋本 和明(花園大学社会福祉学部教授)

発達障害を持つ保護者の子育てへの苦労をこれまで取り上げてきましたが、今回からはそのような保護者への支援のあり方を考えていきたいと思います。

#### ーその人の養育観や子育てのありようを理解ー

発達障害を持つ保護者は子どもの身になれなかつたり、周囲から自分の行為がどのように評価されているかを正確にキャッチする力が弱いので、えてして独自の養育觀のもとでの子育てとなりがちです。それを目にするわれわれは、「なんて酷い親なんだろう!」と思ってしまいます。しかし、その背景を冷静に捉えると、そこには保護者の発達の特性が隠れており、懸命に子育てをしている姿が見えてきたりもします。

そこで支援者がかかわる上で気をつけなければならぬことは、目の前にいる保護者を批判せず、まずはしっかりとアセスメントすることです。なぜ保護者はあの場面であるような行為に及んだのか、そして、その行為をしている時の保護者の様子や行為後にその事態をどう認識しているのか…。そうすることで、その保護者の養育觀がわかつたり、支援のヒントが浮かぶのです。

乳児がなぜ泣くのかについて保護者の共感力がうまく働かないばかりに、いろいろがつのり乳児をはげしく揺さぶるという危険な行為におよんだという事例がありました。周囲は「子どもの気持ちになってまずは考えてみては?」とか、「なぜ泣くのかを想像してみては?」と助言しますがまったく改善がありません。もしその保護者が共感力やコミュニケーション力が十分でない発達の特性を抱え、子どもがなぜ泣くのかが皆目見当がつかないとしたら、この助言は役に立ちません。逆にそう助言されることでますますその保護者は混乱し、ストレスフルになるかもしれません。

そこで、まずはこの保護者がどの程度の共感力があるのか、乳児以外の幼児や大人に対してはどうか、言葉以外に相手のしぐさや態度に対する感受性はどうか、等についてまずは把握していきます。仮に共感力が十分でなかつたとしても、乳児が泣いた時のさまざまな対処法を保護者と支援者が事前に考えておくといいかもしれません。例えば、泣いたらまずは抱っこしてしばらく動き回る、それでも泣き止まない場合は母乳もしくはミルクを与えたり、

おむつを換える。それでも効果がなく保護者がイライラするのであれば、安全な場所に乳児を寝かせて、しばらくその場を離れる。そして、乳児の泣き声の大きさがいつもと大きく違う場合は、怪我や病気の可能性もあるので、医療機関に相談に行くという例外も含めた手順書が用意されておれば、少なくとも乳児を揺さぶるという最悪の事態は避けられそうです。

#### ー支援者側の共感力を活用ー

保護者に共感力が十分でなかつたとしても、その配偶者や家族、あるいは支援者に共感力が備わっておれば、その保護者の子育てが円滑に行くようにある程度は補えるものです。そのためにも、まずは支援者がその保護者の立場になってみることです。もし自分に発達障害の特性があり、共感力が不足していたり、見通しが持てずに強い不安に曝されていたなら、この子育て場面においてどう対処するだろうかと想像してみることです。また、そんな局面に立たされたときにどのようなアドバイスが役に立つのかも立ち止まって考えてみるといいでしょう。こちらの共感力をフルに活用することで、その保護者の子育ての苦悩がこれまで以上に理解できたり、問題解決に向けた支援の方法が浮かび上がるかもしれません。

先ほどの乳児の泣き声に苦悩していた保護者の一人にこんな例がありました。その保護者は聴覚過敏があり、ちょっとした物音でもビクンと反応したり、大勢の人混みの中ではいろんな雑音が耳に入ってきて耐えられないという人でした。そして、わが子ではあるけれども、その子どもの甲高い泣き声にいつも耳を覆いたくなるほどの不快感を抱いてしまうのです。最初は支援者もその保護者の聴覚過敏があることがわからず助言を与えていましたが、「もしかして聴覚過敏があることで子どもの泣き声により対応がまずくなるのかも」と考えました。そして、子どもが泣き出した場合はヘッドホンをつけて育児や家事をするようにアドバイスを与えました。するとその保護者はすいぶん気分が軽くなり、イライラすることも少なくなったのです。

以上のように、支援のコツとして、まずはこちらの共感力をフルに活用してアセスメントに徹することが支援の第一歩だと考えます。